

寺通信

涅槃会と春彼岸法要

涅槃会の「涅槃」とは、「あらゆる煩惱の火を吹き消した」という原意を持ち、「さ」から「な」の境地」を指す言葉となりました。35歳でなとりを開いたお釈迦さまは、そのと

きに涅槃の境地に入られたのですが、煩惱の原因といわれる肉体が、死によってなくなった(滅びた)ことから、その逝去のことを特に「涅槃」といいあらわし、ご命日の法要を「涅槃

会」というようになりました。

ご命日は陰暦の2月15日(満月の日)と伝承されたことから、日本では2月15日もしくは旧暦の同日(今年は2月23日)、または月遅れの3月15日に法要を行っています。

冒頭に、お釈迦さまの没後255年と記しましたが、これは東南アジア(タイ、ラオスなど)に伝わる没年をもとに世界仏教徒連盟が採用したもので、西暦に対して仏暦と呼んでいます。

お釈迦さまの臨終の際、弟子が「葬儀はどのようにしたらよいか」を尋ねると。

「荼毘(火葬)に付し、遺骨を骨壺に納めて、塔を建立するように」とおっしゃいました。現在の日本のお葬式やお墓はこれが由来とされて

発行
浄業寺
〒864-0003
荒尾市宮内出目533
0968-62-2120
林鐘院
〒833-0013
筑後市北長田706-2
0942-52-5524



涅槃図



法然上人涅槃図

よって8万4千の仏塔がインド各地に建てられると出家者、在家信者問わず、広く仏教が信仰されるようになったのです。

一般に、涅槃図といえば、「お釈迦さま」ですが、お釈迦さまの涅槃図の構図をもとにした各宗派のお祖師様の涅槃図などもあります。

「法然上人涅槃図」はそのひとつで、お釈迦様の説かれた『無量寿経』『無量寿経』『阿弥陀経』をよ

います。
塔(仏塔)はインド各地に建てられ、お釈迦さまの遺骨(仏舍利)が納められました。そして200年後、仏教を篤く信仰したアショーカ王に

りどころとした浄土宗祖・法然上人が亡くなったときの様相を表したのです。法然上人を囲み128名の僧侶が悲しみ、図の左上から上人を照らしている太陽は、阿弥陀さまの

来迎を表していると言われていると伝わっています。

また、左下にある文は「仏のような法然上人の最期の様子を描きしないのは、もはや罪といえるので、これを絵にして末世の衆生のために描く」と二祖聖光上人によって記されたものです。

※浄土宗新聞平成28年2月号より転記

3月15日には、両方の掛け軸を浄業寺に下げますので、お揃いでおまいりにお出かけ下さい。